

みんなの環境 わたしたちの実践

本実践事例集は、各学校における環境教育の一層の推進を目指し、県内の優れた実践を紹介するものです。

掲載校は、第6回群馬銀行環境財団教育賞において最優秀賞・優秀賞に選ばれた学校です。

群馬銀行環境財団教育賞は、群馬県環境教育賞（平成5～19年度）を引き継ぐ形で、平成20年度から実施されているものです。



実践事例

1 小学校における実践

高崎市立六郷小学校

「自然とつながろう、かかわろう。そして、コエ（声）出し、エコ活動」

2 中学校における実践

渋川市立小野上中学校

全校生徒で種から育てる植栽活動」

3 高等学校における実践

群馬県立勢多農林高等学校

「赤城山サクラソウの保護活動」

平成26年2月
群馬県教育委員会

小学校における実践事例

高崎市立六郷小学校

1 活動名 「自然とつながろう、かかわろう。そして、コエ（声）出し、エコ活動」

2 環境教育としてのねらい

本校は、平成22年度にユネスコスクールに認定され、教科の学習や委員会活動で、全校児童でESD（持続発展教育）に取り組んでいます。ESDとは、私たちとその子孫たちがこの地球で生きていくことを困難にするような問題について考え、立ち向かい、解決するための学びです。環境、福祉、社会、国際理解などの問題などがあります。本校では、環境教育を中心にESDに取り組み、次の3点を中心に活動しています。

- ① 環境教育、人権教育、国際理解などの学習をESDカレンダーとして教育課程に位置づけ、学校全体で取り組むことで、意図的・計画的に環境に関心を持ったり積極的にかかわったりする場を設定します。
- ② 環境についての教科学習や委員会活動を通して、今自分ができる活動を考えさせ、実践できる力を育成します。
- ③ 栽培活動・環境活動と福祉活動を連携させることにより、相手を思いやる心を養うとともに、自分の活動が他の人に役立つという自己有用感を持たせます。

3 学校及び地域の環境の状況

本校は、旧高崎市の周辺部に位置する児童数616人の学校です。学校周辺は宅地化や商店の進出、道路の拡充などにより、子どもたちが自然とかかわる機会は減少しほとんどありません。校区内には、六郷公園などの公園や、ハナミズキ通りなどの道路沿いに街路樹が植えられ、子どもたちが緑の木々に接する場所もあります。

4 活動の内容

1) 各学年での取組

全学年のESDカレンダーを作成し、教育課程に位置づけ、主に生活科・総合的な学習の時間に「自然とつながろう、かかわろう」として学習しています。本校の子どもたちにとって、自然を守る活動の前段階として、自然と触れ合い自然のよさを感じることができる場を設定することが、環境教育にとって重要と考えています。

① 1年生 フォレストリースクール

県環境林業部の協力のもと、子どもたちがふだんよく遊ぶ「六郷公園」で春・秋・冬の年3回実施しました。

春は、草花を利用したお弁当づくりを実施しました。草花の感触やにおい・色彩などを体感しながら、自分の思いや個性を生かしたお弁当を制作しました。

秋には、公園にある葉を利用した「葉っぱジャンケン」や、講師の先生と同じ木の葉などを探す「同じ物を見つけよう」というゲームをし、意識的に自然と関わることができました。

冬は、カエデなどの種を紙とクリップで作って飛ばすことにより、種が遠くまで飛んでいく仕組みを体験しました。

② 2年生 ハナミズキ通りの観察

学校近くにあるハナミズキ通りには、たくさんの街路樹が植えてあり、四季折々の花や紅葉が見られます。ふだんは気付かずに通り過ぎてしまいましたが、生活科の学習として観察することで、子どもたちは意識して街路樹を見ることができました。また、ミニトマトや校内の菜園でサツマイモを栽培し、食育にもつなげています。

③ 3年生 草花の栽培・地域学習

理科の学習では、ヒマワリ、ホウセンカ、ピーマン、ワタの4種類から自分の育てたい植物を選び、一人1鉢で栽培し観察しました。ピーマンやワタはふだん育てたことがないため、子どもたちは興味を持って観察しました。

また、公園や店などの地域学習をグループごとに行い、学習後は地域にある公園の様子や店の様子を模造紙にまとめて発表しました。地域学習で、自然だけでなく地域の人々とのかかわりもさせていただきました。

④ 4年生 エコムーブ号を活用した学習

4年生は環境問題のオリエンテーションとして、県の移動環境学習車「エコムーブ号」の講師の先生から話を聞き、子どもたち一人一人に環境問題の課題を持たせることができました。夏休みには家庭の協力のもと、子どもたちは地球温暖化や水質汚染などについて調べ、家庭でグリーンカーテンの栽培、温暖化防止のための打ち水の実施、家庭の電力調べ、エコクッキング、ゴミの分別等を実践しました。実践内容は、2学期の学校公開日に保護者や地域の方々に発表しました。

⑤ 5年生 尾瀬学習・バケツ稲づくり

平成22年度から県施策の「尾瀬学校」に参加しています。学習の流れは、

- a) 尾瀬事前学習として、尾瀬ガイドに来校していただき、尾瀬の現状や環境問題について保護者と一緒に話を聞きました。保護者と一緒に講演を聞いたことで家庭でも話題に上がり、一層の意識づけができました。
- b) 尾瀬学校で調べたい課題を一人一人立てました。子どもたちからは、尾瀬の植物、昆虫、気候、木道のこと、自然を守る工夫などの課題が出ました。
- c) 尾瀬学校では、尾瀬の自然に実際に触れました。自分が持った課題に対して、ガイドにインタビューしたり、草花の写真を撮ったりしました。
- d) 帰校後は、模造紙等にまとめ、学校公開日に保護者に発表しました。また、尾瀬の様子を思い出し「この緑 未来のために つなげよう」など、子どもたちの作品を尾瀬文学賞俳句大会に出品しました。

バケツ稲づくりも行い、水管理の大変さなどを、栽培を通し体験しました。

⑥ 6年生 水生生物調査に参加

夏休みに行われる高崎市環境政策課主催の水生生物調査に平成18年度から継続して参加し、烏川の調査を行っています。調査では、環境政策課の方から水生生物の種類を教えていただき、カワゲラやヒラタカゲロウ、ヘビトンボなどの水生生物の生育地や数を調べ、川の水質や汚染の状況を確認しました。

子どもたちの感想を紹介します。「上流は自然が豊かで川の水も下流と比べると、

きれいで透き通っているのが分かりました。川にどういった水生生物がいるのかを調べることで、川の環境が分かることを学びました。これからも川は、ずっときれいな姿になってほしいと思いました。」

⑦特別支援学級 野菜の栽培

年間を通し、学級園でトマトやキュウリ、ダイコンなどを栽培、収穫することで自然に親しんでいます。秋にはドングリや松ぼっくりなどを使い作品を仕上げ、作品展に出品しました。

2) 委員会活動から発信して全校への取組に

5・6年が委員会活動を行っています。「コエ（声）出し、エコ活動」をキャッチフレーズに環境委員会と奉仕委員会が主になり、全校児童に呼びかけ（声出し）て、エコ活動をしています。特に、福祉的な視点も取り入れて環境教育を行っています。

①環境委員会 日常的なエコ活動と栽培活動

日常的な活動として、「環境委員会エコパトロール」のビブスを着用し、休み時間に毎日、節電節水活動のため、校舎内を巡回しています。5月の児童集会では、「毎日行っている歯みがきの時に節水のためコップを使ったり掃除の時にバケツを使ったりしよう」、「教室内や廊下などの節電をしよう」、「ゴミを減らそう」などの内容で、全校児童に向けて劇とクイズで資源の大切さについて啓発しました。



また、学校園の花壇に四季折々の花を植えたり、来賓玄関の横にグリーンカーテンを栽培したりしてお客様をお迎えしています。夏休みも除草や水くれのために、当番を決め活動を行っています。平成24年度からは、ヒマワリの種を集めて、福島県の障がい者施設に送っています。種は、花壇にヒマワリの種を蒔いて種を採ったり、代表委員会と合同で、全校児童や地域にひまわりの種の回収を呼びかけたりして集めました。障がい者施設からお礼のお手紙をいただき、子どもたちにとり、活動の励みになりました。

②奉仕委員会 ペットボトルキャップの回収

全校児童に、「アフリカにポリオワクチンを送ろう」と児童集会で呼びかけたりポスターを掲示したりしています。ペットボトルキャップはいつでも回収できるように、児童玄関に回収箱を用意してあります。ポリオワクチンの数は児童玄関に図で表示され意欲づけにもなっています。本校の活動が地域にも広まり、六郷公民館や地域の店舗からもたくさんのペットボトルキャップが集まり、協力していただいています。

③全校・PTAの取組

冬休みを利用し、全校で家庭と協力して「県民アクション ストップ温暖化」に参加し、環境教育に取り組んでいます。子どもたちの感想は以下のようです。「節電や節水がどれだけ大変なのか分かったので、これからはシャワーを無駄に使わない

ようにする。」「毎日の習慣でなかなか実行できないこともありましたが、炭酸ガスのことを家族で考えられたのが、良かったです。」

また、P T A活動として、飲料用のテトラパックや使用済みインクカートリッジのリサイクル活動を行い、回収箱を児童玄関の近くに設置し、子どもたちや保護者がいつでも回収に参加できるようにしています。

3) 活動の公開

活動の様子は、本校のホームページで公開しています。平成25年度はE S DについてP T A広報でも取り上げていただき、活動の様子を保護者や地域などにお知らせできました。また、児童玄関には「E S Dコーナー」を設け、活動の様子や児童集会で使った資料などを常時掲示してあります。保護者の方も来校したときに活動の様子を見ていただけるようになっています。



5 成果と今後の課題

1) 成果

- 生活科や総合的な学習の時間を主に、自然とかかわる学習を教育課程に位置づけて行ってきたことで、全校児童が自分の身の回りの自然を再確認でき、公園で遊んでみたいなど自然にかかわろうという意識もでき始めています。
- 環境委員会や奉仕委員会が中心になり、全校児童にエコ活動を行ったことで、子どもたちの環境意識や実践に取り組もうとする意識が高まってきました。
- 学校のホームページやP T A広報で学校の取り組みを紹介していただいたので、環境教育への取組が可視化でき、理解を深められてきました。
- ヒマワリの種を育て、福島県の障がい者施設に送る活動を通し、児童一人一人が、目的を持って活動に取り組むことができました。
- 7月に行った学校評価で「あなたは、日ごろの生活で、環境にやさしい生活をしていると思いますか」を児童に質問したところ、89%の児童が「とてもしている」「している」と回答しました。また、12月に同様の学校評価を行ったところ、90%の児童が同様に回答しました。このことから、環境に対する意識づけが子どもたちの中に着実に定着してきていると考えられます。

2) 課題

- 環境教育を生活科や総合的な学習の時間などの教育課程に位置づけることで、子どもたちに6年間を通じて環境問題にかかわらせることです。
- 環境問題への知識だけでなく、E S Dでねらっている自ら課題を見つけ、課題解決に向けて実践する力を子どもたちが身に付けられるように、総合的な学習の時間を中心に授業改善を行うことです。
- 保護者や地域へのより一層の啓発のために、活動の情報公開を行うことです。

1 活動名 「全校生徒で種から育てる植栽活動」

2 環境教育としてのねらい

本校では、勤労生産・奉仕的行事、委員会活動として、地域や保護者の協力の下、植栽委員会を中心に「全校生徒で種から育てる植栽（植物栽培）活動」を行っています。この活動のねらいは次の3点です。

- ①植物を種から育てる体験を通して、生命の神秘・自然の偉大さを知り、それによって生命や自然を尊重し、情操豊かな、思いやりのある生徒を育成する。
- ②種から育てた花に、水やり当番表に従い夏休みも含め毎日継続して水やりを行うなどによって責任感を養う。
- ③育った苗を幼稚園・小学校に寄贈することにより3校・園の連携を図る。また、地域講師（子ども生き生き絆サポーター）の指導の下、保護者とともに活動を行い、咲いた花を地域の公共機関や保護者に寄贈することにより、地域や保護者との連携を図るとともに地域に緑化活動を広め、郷土愛を育成する。

3 学校及び地域の環境の状況

本校は渋川市小野上地区にある3学級、全校生徒数48名の学校です。

小野上地区は、群馬県の中央部のやや北西寄りにあり、東は渋川市子持地区、西は中之条町、南は吾妻川を隔てて、渋川市金島地区と東吾妻町東地区、北は小野子山、中岳、十二ヶ岳を経て高山村に接しています。地区全体が南に向けた傾斜地にあり、集落は吾妻川の谷沿いの平坦部に集まっています。山林面積が地区の70%を占めています。学校を始め、地域全体に緑があふれ、里山が広がっています。各家庭でもガーデニングが盛んに行われており、小中学校の卒業式には、毎年地域の方が大切に育てた桜の花を寄贈して下さり卒業式会場を飾ります。小野上温泉と近くの温泉公園、道の駅「おのこ」には多くの観光客が訪れ、景観を楽しんでいます。



4 活動の内容

1) 種から育てる植栽活動

全校生徒48名全員で、地域講師の指導の下、時には保護者とともに、種まきから始め、育苗ポットへの移植、更にその苗をプランターや花壇に植え替えるなど、年間

を通して地道な活動を行っています。学校中が四季折々の花でいっぱいになっています。草花の苗を購入することなく、種からすべての花を育てていることが大きな特色です。

四季を彩る花の種類は次の通りです。

早春からのパンジーとチューリップに続き、5月に入ると玄関には、県内では例を見ないルピナスが飾られます。夏から秋にかけては、マリーゴールドのプランター 150 個・サルビア 100 個、更に百日草（ジニア）30 個が学校周辺を彩っています。

隣接する、幼稚園・小学校との3校・園の連携の一環で、種から育てたマリーゴールド・サルビアの苗をそれぞれの学校・園に寄贈しています。



また、希望する家庭にはマリーゴールドの苗を配布しました。地域の公共機関に春にはパンジー、夏から秋にマリーゴールド・百日草のプランターを配布し、飾られています。学校の畑にはトマト・キュウリ・ナスが植えられ、校舎のグリーンカーテンには種から育てたゴーヤーと珍しい果物キワノが日陰を作ってくれます。

生徒が活動後に自己評価できるように、活動の意義の書かれた「植栽カード」を活用することによって常に振り返りができるようにしました。植栽カードに記された「大きな樫の木も小さなドングリから」という言葉には「小さな努力の積み重ねが、大きな目標・夢をかなえる」という意味が込められています。

3月の卒業式・4月の入学式では、生徒が種から育てたパンジーとチューリップの寄せ植えが地域の方からいただいた桜の花とともに式場を彩ります。また、体育大会にも沢山の花がトラックやテント前に配置され会場を盛り上げます。数百のサルビア・マリーゴールド・百日草、ルピナスのプランター等が玄関周辺を彩る様子は、時々、上毛新聞でも紹介されます。

2) 「いつでも・どこでも・何にでも全員参加」をモットーにした、環境保全

①地域清掃ボランティア、通学路清掃、プール清掃

地区PTAで行っている地域清掃活動には、生徒も参加しています。休日の実施にもかかわらず、生徒の大半が参加し、保護者や地域の方と環境美化に努め、共に汗を流しています。また、生徒会主催で通学路清掃や地区の小学校も利用しているプールの清掃活動も行っています。

②生徒会による牛乳パック・ペットボトルのふたの回収活動

給食の牛乳パックを毎食後、全生徒がゆすいで広げ、給食委員が回収しています。また、各生徒が家庭から持ってくるペットボトルのふたを本部役員が洗って回収しています。回収する生徒の取り組みの様子では、男女の協力と役割分担がしっかりできており、異学年で共に活動し、上級生が下級生の面倒をみている光景が日常的に見られます。

③地域の畑での除草体験

生徒に汗を流す本物の勤労体験をさせたいとの願いから、地域の方に畑をお借りし、朝から夕方まで一日中畑で草むしりをさせていただきました。汗まみれ、ほこりまみれになる中で、生徒たちは働くことの大変さ、自分たちの手で一面の草っ原が見事な畑に生まれ変わる達成感、充実感を感じていました。お世話になった農家の方には、広い畑を一枚提供していただき、一日中生徒につきっきりでご指導いただきました。お昼は生徒が自分で握ったおにぎりを持参するという指導でしたが、子どもたち全員に、ニラ玉スープをご馳走して下さいました。表面的な体験ではなかったため、後に行った生徒の体験発表も大変充実したものになり、環境保全の大変さと大切さを身をもって学ぶことができ、本当に充実した体験学習でした。本校の生徒が素直に伸びていくのは、地域の教育力がしっかりしており、地域によって支えられているからであることを改めて感じました。

5 成果と今後の課題

1) 成果

- 植栽委員会を中心とした全校生徒による植栽活動への取組を通して、環境保全意識の高揚が図れました。実際、休日に行う通学路清掃活動にも生徒の大半が積極的に参加し、保護者、地域の方と環境美化活動に取り組んでいます。
- 年間を通して、計画的、継続的に行っている活動のため、生徒の自然、植物愛護の意識が高く、生徒の主体的な活動になっています。またこの活動や花があふれる本校の景観は本校の大きな特色といえます。
- 全校生徒での取り組みのため、異学年の交流が活発で、経験者の上級生が下級生を指導している様子が日常的に見られます。夏休みには親子で早朝に学校に来て、水やりをする光景も見られます。また、花壇の整備・道具の後片付け等、地道な活動により、植物栽培の大変さとやり甲斐を実感し、責任を持った態度が見受けられました。
- 育った苗を地域の学校・園に寄贈することにより幼小中の連携を図ることができました。また、地域講師（絆サポーター）の指導の下、保護者とともに活動を行い、咲いた花を地域の公共機関や保護者に寄贈することにより、地域や保護者との連携を図るとともに地域の緑化活動に役立つことができました。

2) 課題

- 生徒数減少、地域の人口減少、少子高齢化が進行する中であって、活動規模を維持させていき、地域の協力を今後ともより充実させていくことが課題です。本年度、特に地域ボランティア（絆サポーター）による支援に力を入れてきましたが、まだ本校植栽担当教諭の指導が中心です。今後、職員の人事異動等で活動が停滞化しないためにも、地域のボランティアの継続的な支援と指導を仰ぎたいと考えています。
- 日常的な活動を中心にしてきたため、意図的な心情面の育成等が十分行えていないとはいえません。今後は、道徳、特活、各教科の諸計画を見直し、改善、充実を図りたいと考えています。

1 活動名 「赤城山サクラソウの保護活動」

2 環境教育としてのねらい

この赤城山サクラソウの保護活動は、平成 13 年から活動を開始し、今日に至るまで、先輩から後輩へと、脈々と活動を受け継いできました。このような活動を通して、環境保全においては、継続的で地道な活動が非常に重要であることを理解させることをねらいとしています。さらに、環境保全に役立つバイオテクノロジーの活用について学習し、将来にわたって地域の環境保全に主体的に携わる人材の育成をねらいとしています。

また、本活動はサクラソウを盗掘から守るための多様な活動を展開しているのが特徴であり、様々な視点から課題解決する能力を身につけさせることが重要だと考えています。

3 学校及び地域の環境の状況

本校は赤城山の麓に位置しており、身近で慣れ親しんだ自然環境です。農業高校であるため、演習林や農場があり、環境を学ぶには好適な環境にあると思います。本活動にあたっては、群馬県自然保護連盟、群馬森林管理署、筑波大学、サントリー天然水 赤城 100 年の森協議会等との連携がスムーズになされています。

4 活動の内容

サクラソウは、春先に薄紅色の可憐な花を咲かせる山野草です。かつては、日本全国に広く分布していましたが、現在では年々個体数が減少し、国のレッドデータブックで「準絶滅危惧種」に指定される貴重な植物となっています。群馬県においても、かつての自生地が数多く消滅し、群馬県版レッドデータブックで「絶滅危惧 I 類」に指定されています。

群馬県赤城山にある自生地も、一度は絶滅したと思われていましたが、平成 13 年に再発見されました。これを契機に、群馬県自然保護連盟からバイオテクノロジーを活用したサクラソウの保護活動の依頼を受け、以来今日まで保護活動を継続しています。

サクラソウには「象徴種」としての役割があると考えています。象徴種とは、その種を保護することによって関係する全ての生物や周辺環境が保全される象徴的な種のことです。赤城山サクラソウの保護活動は、サクラソウだけでなく、赤城山全体の環境保全に繋がる重要な活動だと捉えています。本校での活動を中心とし、群馬県自然保護連盟、関東森林管理局、地元渋川市、筑波大学、サントリー天然水 赤城 100 年の森協議会等を巻き込み、赤城山全体の環境保全に繋がるような保護活動を展開しています。

1) 自生地の環境整備活動

サクラソウは「半自然植生」と言われる里山の代表的な植物で、下草刈りや炭焼きなど、人間の管理によって生育環境が保たれていました。しかし、現在は山林の管理が放棄され、サクラソウの生育環境が悪化しています。

そこで、自生地に繁茂するミヤコザサ等の下草刈りを毎年行っています。また、早春の日当たりを邪魔する木立の間引きについても、国有林であるため、森林管理局立ち会いの下実施しています。これによりサクラソウ個体数は年々増加しています。

このような自生地での活動は多くの環境保護団体や企業を巻き込む活動となっています。サントリー天然水の森 赤城 100 年の森協議会からは、自生地の盗掘を防止するための勢多農モデルの保護フェンスを設置していただきました。このフェンスは水による株の移動を妨げない構造となっています。保護フェンス設置後の自生地では盗掘の被害が激減し、個体数が増加しています。

2) 自生地の調査活動

毎年、赤城山自生地の株数調査を行い、保護活動の指針となるデータを蓄積しています。年々株数は増加し、平成 16 年は総株数 563 株でしたが、平成 25 年には 2,393 株に増加しています。保護活動の成果が確実に表れていると考えられます。このデータは赤城山サクラソウのデータとして県や環境団体で活用されています。



また、管理している集団の外で毎年、流出株が発見されています。サクラソウは鉄砲水等の流れを利用して自生地を広げる性質があり、少しずつ移動し増加したものと予想されます。流失株によって大きな集団が形成されているため、盗掘防止の保護フェンスを新たに設置するなど、柔軟に対応しています。

このほかにも、自生地の遺伝的多様性について調査しました。自生地の花を調査すると、種子が形成されておらず遺伝的多様性が乏しいことが判明しました。自生地を健全な状態で保護するためには、種子繁殖が行われ遺伝的多様性が確保される必要があります。サクラソウは「異型花柱性」の植物で、花柱が長い「長花柱花」、花柱の短い「短花柱花」が存在し、異なる花同士での交配でしか種子が形成されません。二つの花は本来 1 : 1 の割合で存在しますが、赤城の自生地は「短花柱花」しか存在しません。

そこで、自生地由来のサクラソウを栽培している地元農家から、長花柱花の花粉を提供していただき、自生地のサクラソウとの交配実験を実施しました。その結果、種子形成が確認でき、交雑親和性があることがわかりました。今後、自生地のサクラソウと農家のサクラソウが遺伝的に同一な個体群か確認し、関係諸機関と慎重に協議し、サクラソウ自生地での種子形成につなげていきたいと考えています。遺伝解析については、筑波大学と提携して研究に着手しています。

3) 盗掘を防ぐ活動

サクラソウは、その美しさから盗掘の被害が絶えず、懸命な保護活動により個体数の増加が見られるようになった自生地でも、盗掘による被害で思うように保護活動が進まないことが問題となっています。

そこで、安価で大量にサクラソウ苗を販売することで、稀少性を緩和し、自生地からの盗掘を防ぐ活動を行っています。組織培養技術を利用した苗の大量生産に取り組み、葉片培養によるサクラソウの無菌培養系を確立しました。本校では、年間 3,000 鉢以上の苗生産が可能となっています。



増殖したサクラソウ苗は、開花時期を中心に各種イベントで販売し、盗掘防止と環境保全の呼びかけを行っています。本校の農業まつりや赤城山でのサクラソウ販売会は恒例となっており、私たちが実践しているサクラソウの保護活動について理解が深まっていると実感しています。

5 成果と今後の課題

1) 成果

これまでの活動は、行政をも大きく動かし、サクラソウ自生地を横断する予定だった林道工事の迂回が実現しました。

また、大規模な盗掘をきっかけに、本校と渋川市、関東森林管理局、鳥類保護連盟等との対策協議会が立ち上がりました。そして「サントリー天然水 赤城」100 年の森協議会のご支援により、勢多農モデルの保護フェンス設置が実現しました。今後、流出株によって形成された新たな集団への保護フェンスの設置も検討されています。

さらに、専門的にも高く評価され、科学雑誌「Newton」や本年度改訂された「図解植物バイオテクノロジー」の教科書に、バイオテクを活用した環境保全活動の実践例として取り上げていただいています。

2) 今後の課題

今後とも、自生地での環境整備活動及び調査を行っていくと共に、流出株によって形成された新しい自生集団についても管理を進めていきます。

また、自生地のサクラソウと近隣農家さんの保護しているサクラソウの遺伝解析について、筑波大学との共同研究を進め、自生地での種子形成につなげていきます。